喜春流
味なことば

中村喜春
Kiharu Nakamura

講談社

喜春流味わいことば

中村喜春
Kiharu Nakamura

江苏工业学院图书馆
藏书章

講談社

［著者略歴］
大正二（一九一三）年東京・銀座に生まれる。祖父、父も医者。生来の芸事好きが高じ、数え十六歳で新橋の芸者になる。お座敷をつとめながら、英語学校に通い、英語をマスター。英会話のできる芸者として、外国の著名人の接待や、戦後、進駐軍との通訳などでも活躍する。昭和三十一（一九五六）年に渡米し、以来四十一年、アメリカで暮らす。現在ニューヨークでオペラのコンサルタントをするかたわら、小唄、長唄、三味線などの古典芸能や着物の着付けをアメリカ人や在米の日本人に教えている。二度の結婚を含む、その波瀾万丈の半生は、ベストセラーになった『江戸っ子芸者一代記（正篇・戦後篇・アメリカ篇）』に詳しい。他の著書に、『ああ情なや日本』『あたしはアメリカが好き』『いきな言葉　野暮な言葉』（以上、草思社）など多数ある。

喜春流（きはるりゅう）　味（あじ）なことば
一九九七年九月二十五日　第一刷発行
著者――中村喜春（なかむらきはる）
カバー千代紙――菊寿堂いせ辰
装幀――スタジオ・ギブ（川島進）
©Kiharu Nakamura 1997, Printed in Japan
発行者――野間佐和子　発行所――株式会社講談社
東京都文京区音羽二丁目一二―二一　郵便番号一一二―〇一
電話　編集〇三―五三九五―三五〇〇　販売〇三―五三九五―三六一五　製作〇三―五三九五―三六一五
印刷所――慶昌堂印刷株式会社　製本所――大口製本印刷株式会社
落丁本・乱丁本は小社書籍製作部あてにお送りください。
送料小社負担にてお取り替えします。
なお、この本についてのお問い合わせは
生活文化第三出版部あてにお願いいたします。
ISBN4-06-208879-7（生活文化第三）
定価はカバーに表示してあります。

まえがき

一九五六年に渡米し、アメリカで暮らすようになってから、早いもので四十一年が過ぎました。最近では毎年のように日本に帰ってきます。今年（一九九七年）も四月から六月上旬まで日本にいて、数日前にニューヨークへ戻ってきました。日本ではなんともハードなスケジュールで、若い方でもムリだと思うくらいでしたが、マア、なんとか倒れずにすみました。幸せなことに、私は時差ボケというのをまったく知りません。それで今度は日をおかずして、ドイツに出かけます。

というのは、ミュンヘンの大きな出版社が、私の本をドイツ語で出してくださいました。私が恐縮してしまうような素敵な本です。表紙がセピア色で、『ＫＩＨＡＲＵ』という本です。『江戸っ子芸者一代記』（草思社刊）の正（戦前）篇、戦後篇、アメリカ篇の三冊をまとめてくださったのです。数え八十五歳の老婆ということで向こうさまはヨボヨボの婆さんを想像なさったようなので、悔しいから、若くて一番美しく撮れている写真をお送りしました。そうしたら、とたんにドイツから編集長とカメラマンが来られました。そして、密着取材というのでし

ょうか、台所で料理しているところや、小唄のお稽古をしているところやらを撮っていきました。「四月か五月に、ぜひミュンヘンに来てほしい」とおっしゃるので、「その時期は日本に行くから、六月過ぎないと行けない」と言いました。それで、向こうは、南ドイツのテレビ、ラジオ、新聞社などのインタビューを用意して待ち構えていてくださるわけです。

だいたい、イギリス、フランス、イタリアをはじめ、そこらじゅうの国には行ったのですけれど、どうしてかドイツははじめてです。だから今からわくわくしています。「年寄り」という自覚症状がないのですから、よそから見たら、なんとも不思議な「年寄り」でしょうネ。

さて、今、私が一番気になっているのは、日本語です。もうメチャメチャで、ものをしゃべることでサラリーをもらっている方たちが、「下座」をシモザ、「他人事」をタニンゴト、「花街」「花柳界」をハナマチ――これは、演歌の偉い先生がおっしゃったので、そうなっちゃったのですが、困ったものです。それと放送局で制限された差別語。「盲縞の着物」のように言い替えようのない言葉はどう言えばよいのでしょうか。『ノートルダムのせむし男』は「ノートルダムの背中にこぶのある男」ですか？　しかも、「手切れ金」も言ってはいけないと言う。手を失った人に悪いから。まあ、それもよいでしょう。「では、なんて言うんですか」と聞くと、「慰謝料と言え」とおっしゃる。ジョウダンジャナイ。慰謝料と手切れ金とはまるっきり違う。たとえば、夫婦が協議離婚するときに、「それじゃ、子どもがいるから、毎月二十万円、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo

払いましょう」これが慰謝料です。毎月、手切れ金を払うなんて聞いたことも見たこともありません。パッチリ手を切るから、関わり合いをハッキリ絶つから手切れ金というのです。

どうして偉い先生がわからないんだろう。小学校しか出ていない私がチャンとわかっているのに。エライ人ってあまりエラクないのだなと思います。

それからもう一つ、気になるのは語尾を上げること。私が一九七四年に日本に来たときは小学生たちが、「僕はアー、お絵描きしてエー、それからアー、公園に行ってエー」こんな具合に、語尾を伸ばして上げていました。なんとも不思議な日本語でした。これは、安保反対のゼンガクレン（「全学連」はアメリカの字引きにも出ています。世界的に有名です）の人が、「ワレワレはアー、世界平和のオー、ためにイー」とやった、その後遺症だと言われました。ところが、今は、アナウンサーも、ホステスさんも、そこらへんのオバさんも、七十歳くらいのおばアさんも、使っています。殺人があった次の朝、テレビ局がマイクを持って近所の人に聞き歩くとき（これはアメリカでも、「アイ・ウイットネス」といって、やっています）、七十歳くらいのおばアさんが、「昨夜はアー、私がアー、会ったときはアー」とやっています。きっと孫や嫁や息子が話すとおりをコピーしているのでしょう。もうこの語尾を伸ばすのは、直りませんネ。いよいよ、蔓延（まんえん）するでしょう。

それともう一つ、これを書き出した理由は、若い人達が、昔からのたとえごとの意味を正反

対にとって話しているからです。たとえば、「情けは人のためならず」。これは人に情けをかけておくと、いつかは自分に返ってくる。どの人にも親切にしてあげると、きっと将来、人に親切が身にしみるときがあるよ、と言っているのだけれど、私のところにいる留学生諸君は、「メチャに人に親切にしたら、その人のためにならないから、あまり知らない人に情けをかけてはいけない」と、思い込んでいます。

また、「おっとり刀」というのは、武士はいつも大刀と小刀と、二本差しています。そして、自宅に帰ってきたときに、初めて「刀掛け」に置いて、裃を脱いでリラックスするわけです。町人ならさしずめ（きっと）どてらに着替えるところでしょうか。武士はふだん着に着替えて座布団に座り、（正座ではなく）膝を崩して、奥さまの運んできたお茶を一服、というところでしょう。そこへ火急の報せ（城内で刃傷や火事など）があったりすると、刀掛けから刀を取って駆けつけるのですが、大小を差している時間もなく「おっとり刀」で駆けつける。取るものも取りあえず駆けつけることを、私達は、「おっとり刀で駆けつけたのよ」と言います。たとえば、いつもご贔屓になっている料亭、あるいはお客さまのお宅とかオフィスとかが火事だったりすると、すぐに箱屋さん、車屋さんを連れて、火事見舞いに駆けつける。そんなとき、「おっとり刀で駆けつけてくれて、ありがとう」と、お礼を言われます。

ところが、これを現代の人は、おっとりとした性格の武士がゆっくりと鷹揚な態度で刀を差

すことと思っています。

これはほんの一部で、意味をとり違えている若い人が大勢います。このまま放っておいたら、それこそシッチャカメッチャカになると思います。私が生きている間に、こうした間違いだけは正しく説明しておきたいのです。老人の戯言（たわごと）とお思いにならずに、どうぞ、昔の言葉も勉強してください。

この頃、しきりに思います。マッカーサーさんじゃないけれど、「老兵は死なず。消えゆくのみ」。もうそろそろ消え去ってもいいのだけれど、でも、ドイツで本を出したし、来年は英語版を出したいし、消えるに消えられません。こういうのを、「娑婆（しゃば）っ気がありすぎる」とでも言うのでしょうか。「雀百まで踊り忘れず」と自分で書いて、納得しています。

著者

喜春流　味なことば＊目次

まえがき　1

あ行

あ

ああ言えばこう言う／相手変われど主変わらず／逢うは別れの始めとや／
秋なすび嫁に食わすな／秋の扇／悪妻は百年の不作／悪銭身につかず／
悪に強ければ善にも強し／朝起きは三文の徳（早起きは三文の徳）／
明日の百より今五十／頭隠して尻隠さず／当たるも八卦、当たらぬも八卦／
後足で砂をかける／アバタもエクボ／虻蜂とらず

い

言うは易く行うは難し／生き馬の目を抜く／行きがけの駄賃／
いざ鎌倉（すわ鎌倉）／石橋を叩いて渡る／医者の不養生／
衣食足りて礼節を知る／以心伝心／磯のアワビの片思い／
痛くもない腹を探られる／一押し二金三男／一富士二鷹三なすび／
一を聞いて十を知る／一挙両得／一寸先は闇／一寸の虫にも五分の魂／

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo

う

命の洗濯／井の中の蛙大海を知らず／鰯の頭も信心から／
言わぬは言うにいや勝る

憂いもつらいも食うてのうえ／魚心あれば水心／有卦に入る／
牛は牛連れ、馬は馬連れ／嘘から出たまこと／嘘も方便／内広がりの外すぼみ／
内股膏薬／独活の大木／馬の耳に念仏／恨み骨髄に徹す／売り言葉に買い言葉

え

栄枯盛衰は世のならい／益者三友損者三友／江戸の敵を長崎で討つ／
海老で鯛を釣る／鴛鴦の契り／縁の下の力持ち／縁は異なもの味なもの

お

老いては子に従う／大男総身に知恵が回りかね／大風が吹けば桶屋が儲かる／
大風呂敷を広げる／陸へ上がった河童／傍目八目／同じ穴の貉／
鬼に金棒／鬼のいぬ間に洗濯／尾羽打ち枯らす／帯に短し襷に長し／
溺れる者は藁をもつかむ／思い内にあれば色外に現る／思い立ったが吉日／
親思う心に勝る親心／及ばぬ鯉の滝登り／女賢しゅうして牛を売り損なう／
女三人寄れば姦しい／女やもめに花が咲く／おんぶすれば抱っこ

か行

か

飼い犬に手を噛まれる／火事場泥棒（火事場のろけ）／
佳人薄命（美人薄命）／火中の栗を拾う／渇しても盗泉の水を飲まず／
河童の川流れ／勝てば官軍負ければ賊軍／我田引水／瓜田に履を入れず／
門松は冥土の旅の一里塚めでたくもありめでたくもなし／
金の切れ目が縁の切れ目／壁に耳あり障子に目あり／可愛さ余って憎さ百倍／
川向こうの火事（向こう河岸の火事）

100

き

聞いて極楽見て地獄／聞くは一時の恥、聞かぬは末代の恥／
雉も鳴かずば打たれまい／机上の空論／来る者は拒まず、去る者は追わず／
木で鼻を括る／木仏金仏石仏／窮すれば通ず／器用貧乏／曲学阿世／玉石混淆

114

く

腐っても鯛／口も八丁手も八丁／苦しいときの神頼み

126

け

127

芸は身を助ける／怪我の功名／下衆の勘繰り

こ

恋に上下の差別なし／恋の恨みと食い物の恨みは恐ろしい／
光陰矢（箭）の如し／後悔先に立たず／孝行のしたい時分に親はなし
弘法筆を択ばず／故郷へ錦を飾る／故郷忘れがたし／
虎穴に入らずんば虎子を得ず／小姑は鬼千匹／言葉は国の手形／
子どもの耳は大きい／子は鎹／子は三界の首枷／転んでもただは起きない／

さ行

さ

細工は流々仕上げをご覧じろ／酒なくて何の己が桜かな／酒に呑まれる／
雑魚の魚交じり／去るものは日々にうとし／触らぬ神に祟りなし／
三尺下がって師の影を踏まず

し

自画自賛をするなかれ／敷居が高い／自業自得／地獄で仏／
獅子身中の虫／事実は小説よりも奇なり／親しき仲にも礼儀あり／

死人に口なし／死ぬ者貧乏／四面楚歌／釈迦に説法、孔子に悟道／
十人十色／小人閑居して不善を成す／賞は厚くし罰は薄くすべし／
将を射んと欲するものはまず馬を射よ／知らぬが仏／沈香も焚かず屁もひらず／
人生七十古来稀なり／身体髪膚これ父母に受く／信用は無形の財産

せ

据え膳食わぬは男の恥／好きこそものの上手なれ／
過ぎたるはなお及ばざるが如し／雀百まで踊り忘れず／
捨てる神あれば拾う神あり／すまじきものは宮仕え／住めば都

そ

精神一到なにごとか成らざらん／青天の霹靂／堰かれて募る恋心／
切磋琢磨／背に腹は替えられぬ／善悪は友による／船頭多くして船山に登る

糟糠の妻／そうは問屋が卸さない／俎上の鯛／損して得とれ

た行

た　180

大器晩成／大は小を兼ねる／竹を割ったよう／立ち寄らば大樹の蔭／
立つ鳥跡を濁さず／蓼食う虫も好き好き／旅の恥はかき捨て／
旅は道連れ世は情け／玉に瑕

ち　185

近火で手を炙る／血で血を洗う／提灯に釣り鐘／提灯持ち

つ　188

付け焼き刃

て　190

亭主の好きな赤烏帽子／貞女は両夫にまみえず／泥中の蓮／適材適所

と　192

問うに落ちず語るに落ちる／所変われば品変わる／
鳥なき里の蝙蝠／鳶に油揚をさらわれる

な行

な

ない袖は振れぬ／泣きっ面に蜂／泣く泣くもよいほうをとる形見分け／情けは人のためならず／七転び八起き／七度探して人を疑え／生兵法は大怪我のもと　196

に

二階から目薬／憎い憎いは可愛いの裏返し／憎まれっ子世にはばかる／二足の草鞋を履く／似た者夫婦／日光を見ないうちは結構と言うな／煮ても焼いても食えぬ／二枚舌／女房と畳は新しいほどよい／人間到る所青山あり／人間万事塞翁が馬　201

ぬ

糠に釘／盗っ人猛々しい／盗っ人に追い銭／盗っ人を捕らえてみればわが子なり／濡れ手で粟／濡れぬ先こそ露をもいとえ　209

ね

猫に鰹節／猫ばばを決め込む／猫を被る／寝た子を起こす／　212

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo